

技術センターに期待すること

技術センター運営委員

大学院先端物質科学研究科 教授 角屋 豊



技術センターが発足してから4年が経ちました。広島大学の法人化とともにスタートしたことや、従来の部局内組織から全学組織へ変更されたことなどから、発足当初は混沌とした状況でしたが、最近は依頼派遣方式も試行を迎えるなど、ようやく方向が見えてきたように感じています。この間、センター長をはじめ、学部や技術センター職員の皆様のご苦労は多大なものであったことと存じます。皆様のご尽力に深く敬意を表する次第です。

さて今回、標記内容での原稿の依頼をいただきました。私はセンター運営委員でもあり、同時に技術職員の方の支援を頂く立場で、これまでも多大な支援を頂いておりました。そこで、まず後者の立場からの希望を述べ、これを踏まえて運営委員の立場での考えを述べさせていただきます。まず被支援者としてですが、一言で言えば、これまでどおり、あるいはそれ以上の支援を御願いたいという事に尽きると思います。これは私に限らず、支援を受けている教職員の共通した希望であると思います。

一方、運営委員としては、このような希望に対していかにして応えるかということになりますが、人員削減の圧力が強い中、量的な意味ではこれまでの支援業務の維持が精一杯で拡大は容易ではありません。従って、質的な部分で希望に応じてゆくことになると思います。これは、学内組織として技術者グループが存在することの必要性や価値ということとも関係し、例えば価格ではない外注との違いをより高めてゆくことを意味しています。このためには、異分野間を含めた技術職員相互の情報やスキルの交換、共同作業などにより、より高く幅のある総合的な技術力を獲得し、提供してゆくことが必要で、それはまた、支援の量的な維持・拡大にもつながる可能性があります。また、学内組織であることの意義として、教員と密接な連携を保てることや、教育における技術支援を行うことも重要であると考えます。これらの点に関しては、依頼派遣システムによって失われないように、特に配慮が必要なところかも知れません。いずれにしても、技術職員の方々のご努力はもちろんですが、組織としての力をいかに発揮するかが重要であり、雑務の低減も含めて、仕組みとしても大いに工夫が必要と考えています。

技術支援（事務支援も同じですが）の業務には、いわゆる「縁の下の力持ち」という古い(?)言葉に該当する部分が多いと思います。昨今、このような言葉や役割が軽視される残念な社会状況ですが、組織的な活動では、こういった業務が実は非常に重要であることは間違いありません。広島大学、さらには学外の方からも、「技術センターがあったからこそ、広島大学では優秀な人材が育ち、文化や社会に貢献する研究成果が生まれた」と、広く認識される状況が実現することを願っております。